独立行政法人教員研修センター
平成２３年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

平成 23 年度

小学校・中学校・高等学校「コミュニケーション能力育成に

関する教育」研修

ー演劇活動を通じて、コミュニケーション能力を育む
指導力向上研修プログラムー

報 告 書

平成 24 年 3 月

大阪府教育センター

目　次

プログラム名とその特徴

プログラムの全体概要

Ⅰ　開発の目的・方法・組織
　１　開発の目的　1
　２　開発の方法・組織　2

Ⅱ　開発の実際とその成果
　１　開発の実際【研修編】　6
　２　研修編における効果測定　13
　　・事前事後アンケート結果
　　・５か月後アンケート結果
　３　開発の検証【実践編】　21
　４　実践編における効果測定　26
　５　コミュニケーション教育に係るシンポジウム　29
　６　「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修の分析及び改善　30

Ⅲ　連携協力による研修についての考察
　１　本研修で開発した関係機関との連携プログラムについて　34
　２　フリンジシアタープロジェクトの取り組みについて　34
　３　連携の実績及び成果　35

Ⅳ　その他
　１　キーワード　35
　２　人数規模および研修日数（回数）　35

Ⅴ　参考資料
　１　「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修に係る連携協議会設置要綱　36
　　（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報　告　書

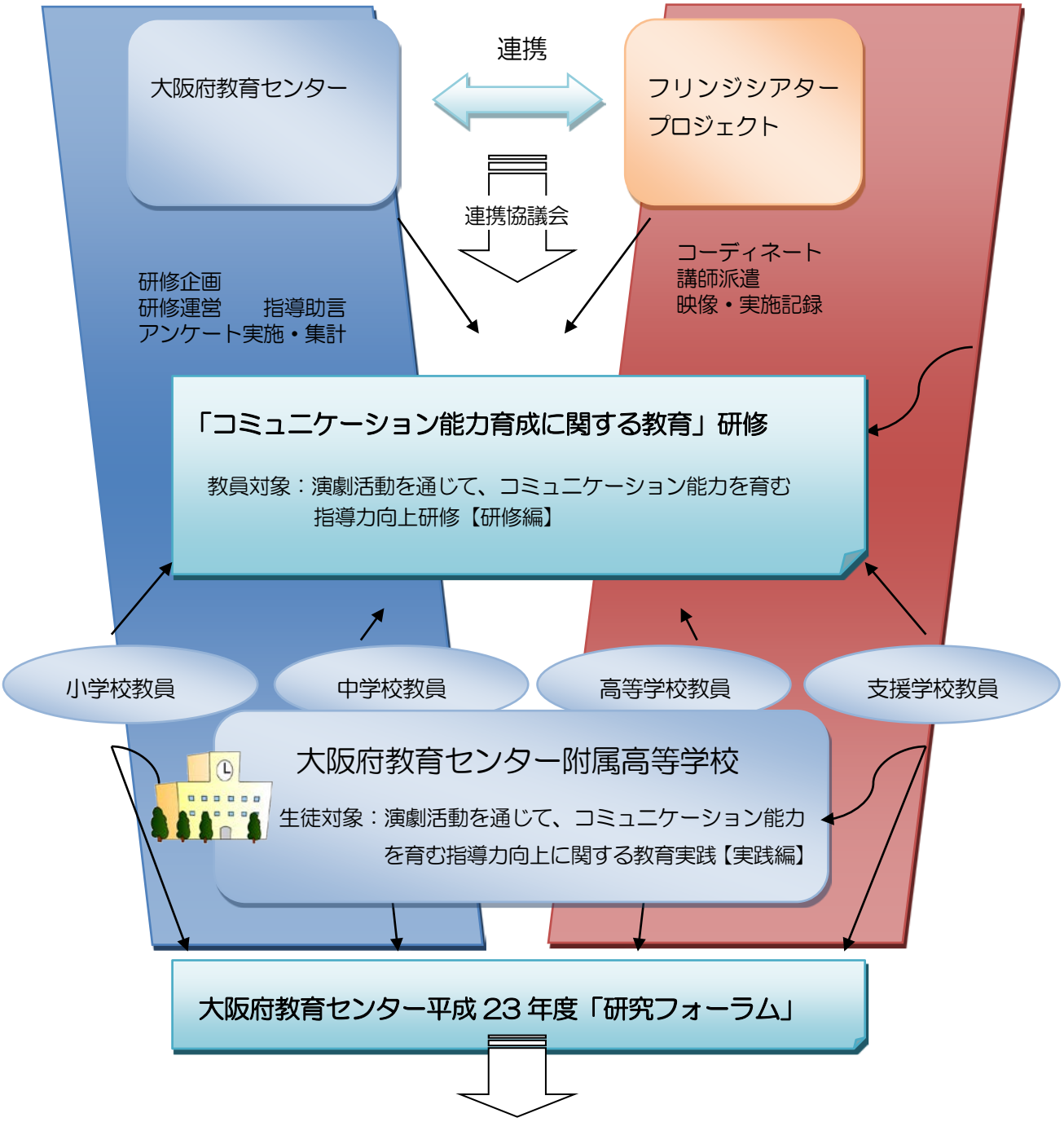
プログラム名	平成 23 年度　小学校・中学校・高等学校「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修 ー演劇活動を通じて、コミュニケーション能力を育む指導力向上研修プログラムー
プログラムの特徴	１.コミュニケーション能力を育む教育実践ができる教員の育成を図る研修を実施する。 ２.大阪府教育センターの実施する研修や大阪府教育センター附属高等学校の授業に、フリンジシアタープロジェクト実施の演劇ワークショップを取り入れ、子どもたちにコミュニケーション能力の要素である「聞く力」「表現する力」「質問する力」「チームとして協調する力」を育成することで、演劇に親しみながら、コミュニケーション能力を深められる学習プログラムを作成する。 ３.「コミュニケーション能力育成に関する教育」が求められている背景及び意義についてのシンポジウムを開催し、講演及び実践を通して、「コミュニケーション能力育成に関する教育」に対する府内教員の意識の向上を図る。 ４.「コミュニケーション能力育成に関する教育」に係る協議会を開催し、研修の計画及び評価・改善を行う。構成メンバーは、大学有識者、演劇家、教育センター指導主事、フリンジシアタープロジェクトとする。

平成 24 年 3 月

機関名　大阪府教育センター
連携先　NPO 法人「フリンジシアタープロジェクト」

プログラムの全体概要

本プログラムでは、下図の関係機関との連携協力体制に基づき「演劇手法によるコミュニケーション能力育成」に関する研修を実施するとともに、研修終了後の受講者による授業実践により、その効果検証を行った。また、「コミュニケーションに関する教育」研修に係る連携協議会を定期的に開催することによって、研修内容の見直し及び評価、改善等を行った。



研修内容の見直し及び評価、改善等

学校における演劇活動を通じて、コミュニケーション能力を育む教育の指導力向上

Ⅰ　開発の目的・方法・組織

１　開発の目的

本プログラムは、演劇活動等を通じて、コミュニケーション能力を育成しようとする学習プログラムである。良好なコミュニケーションを図るためには、思いや考えを表現するための語彙を豊かにし、表現力を身に付けることが重要である。また、自分の思いや考えをもち、それを相手に伝えるとともに、相手の思いや考えを理解することも大切である。相手の話をしっかりと受け止め、状況に応じて的確に反応できるようにする必要がある。そのような力を育成するためには、自分の役割、相手との関係の取り方、ストーリーの展開、それらを互いに討議し、意見を摺り合わせながらひとつの表現にまとめていくことが必須条件である演劇活動が最適である。最終の演劇発表に至る過程の中で、台本を作成するためにグループの意見を調整したり、新しい提案がなされたときの対応等を通じて協同的なコミュニケーション能力が育成されると考える。

コミュニケーション能力は児童・生徒が他者との関係の重要性を自覚し，人生をよりよく生きるために，その基盤となるものである。この研究では演劇活動を通じて、他者の話を聞く力を養うと同時に、自己表現力を培う学習プログラムを作成し、それを実践する指導者の育成を目的とする。

《プログラムの 4 つの柱》

1　「コミュニケーション能力を育む教育」に関する実践ができる教員の育成を図る研修プログラムの実施
2　大阪府教育センター附属高等学校の授業を通して、「コミュニケーション能力を育む教育」に関する研修プログラムの検証
3　「コミュニケーション能力を育む教育」に関するシンポジウムの開催
4　「コミュニケーション能力を育む教育」に関する連携協議会の開催

《プログラムの主な内容》

1　「コミュニケーション能力を育む教育」に関する研修【研修編】
2　「コミュニケーション能力を育む教育」に関する研修【研修編】の評価
3　「コミュニケーション能力を育む教育」学習プログラムの作成
4　「コミュニケーション能力を育む教育」に関する研修【実践編】
5　「コミュニケーション能力を育む教育」に関する研修【実践編】の評価
6　「コミュニケーション能力を育む教育」シンポジウムの開催
7　研修カリキュラムの評価・改善

２　開発の方法・組織

（1）　研修対象：小・中・高等学校および支援学校教職員

（2）　研修日程

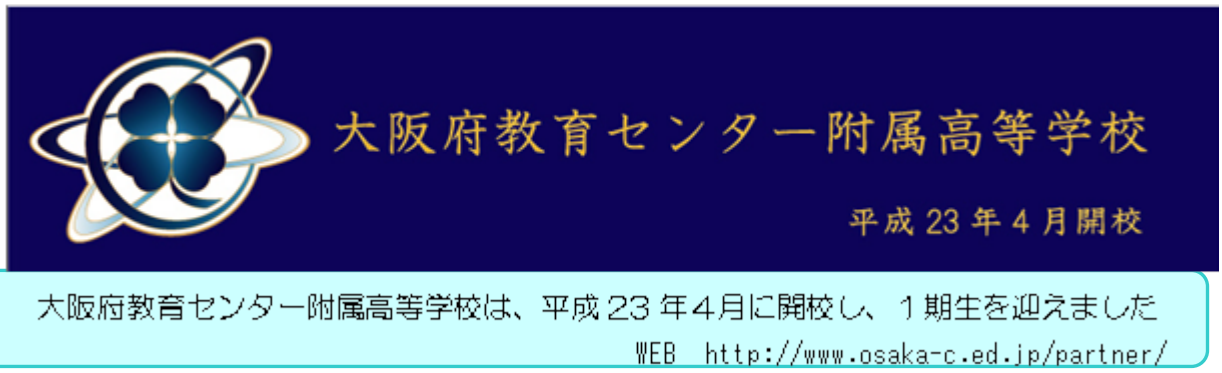
時期等	内　　容	目　　的
7月 ～8月	「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップ【研修編】	「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップを通じて、コミュニケーション能力は児童・生徒が他者との関係を構築し、人生をよりよく生きるための基盤であることを理解するとともに教員の指導力を育成する。
9月	「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップ【研修編】の実施記録書作成	研修のまとめと分析を行い、「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップ【実践編】へつなぐ。
10月	学習プログラムの作成 「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップ【研修編】の評価集計及び実施記録書に基づき、「コミュニケーション能力を育む教育」関する教育の充実のための学習プログラムを作成する。	実施記録書の分析･研究により、授業における効果的な学習プログラムを考える。
11月 ～2月	「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップ【実践編】 大阪府教育センター附属高等学校において、夏の研修を受講した教員が中心となり、コミュニケーション能力を育む学習プログラムを実施し、「コミュニケーション能力を育む教育」に関する授業を行い、実証検証する。 5 回程度は連携先であるフリンジシアターの劇団員にも演劇に関する技術指導を受ける。2 月には予選会を経て、クラスの代表グループを決め、最終的には府教育センターの大ホールで府内の学校にも公開する発表大会を開催する	授業で学習プログラムを実施し、効果測定及び授業分析から、より効果的なプログラムを作成する。

12月	「コミュニケーション能力を育む教育」シンポジウムの開催 ●講演「コミュニケーションティーチングの可能性」「『ワークショップ』をどう定義するか」、「暗黙情報」、「バイパス効果」など、主に学校現場で演劇ワークショップを実践する際に、押さえておいたほうが良い概念、キーワードを、その場での試行とリンクさせながら、論述する。 講師：蓮行 （劇作家・演出家・劇団衛星代表、大阪大学コミュニケーション・デザインセンター特任講師） ●「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップの報告 （大阪府教育センター指導主事） ●実践発表 （実施校担当者及び先行事例の紹介）	「コミュニケーション能力を育む教育」の背景や意義の定着を図る。 「コミュニケーション能力を育む教育」ワークショップ【研修編】【実践編】について、振り返りと意見交換することにより、課題と改善の方向性について検討する。

（3）開発体制

所属・職名	氏名	担当・役割
大阪府教育センター カリキュラム研究室長 主任指導主事 指導主事	 蛭田　勲 天野　誠 岡本　真澄	 開発プログラム連携協議会事務局 「コミュニケーション能力を育む教育」研修の企画・立案
大阪府教育センター附属 高等学校教員	木村　伸司 山元　聡 森本　薫 宮田　早永子 山中　晃司 段野　光宏	「コミュニケーション能力を育む教育」研修受講者 「コミュニケーション能力を育む教育」研修実証検証実践者
NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	蓮行 紙本　明子	開発プログラム実施・運営・記録

（4）研究協力校（実証検証校）の概要



○ 大阪府教育センター附属高等学校について

大阪府教育センター附属高等学校は、全国で初の試みとなる、教育センター附属の学校です。府内学校に発信するために教育センターの研究の検証もします。

大阪府教育センター附属高等学校　　大阪府教育センター

生徒の夢や志をはぐくみ努力を引き出し自己実現へと導く「ナビゲーションスクール」であるとともに、学力をはじめとする様々な教育課題の解決に取り組み**大阪の教育を先導する「ナビゲーションスクール」**でもあります。教育センターの専門スタッフと附属高等学校の教員が、教育センターの充実した教育環境を最大限に活用し、共同して教育活動を展開します。卓越した授業を実践する指導教諭等による授業なども実施します。その成果を広めていくことで、**全ての府立学校の授業力・指導力の向上に貢献していく学校**です。

附属高等学校のシンボル
「学びのクローバー」

○ 充実した施設設備

☆ コミュニケーション教室

オンライン会議型特別教室。ＴＶ会議型授業による海外の学校との交流学習等を実施します。ICT 機器を活用したプレゼンテーション大会、ディベート大会なども行います。

☆ 多目的教室

簡易語学演習機器を活用した語学学習、シンポジウム型授業など、様々な形態の学習活動を行います。

☆ その他、教員が常駐して支援する「質問コーナー」を設けた新タイプ自習室、授業研究教室、小ゼミ室 など

★ 教育センターの充実した教育環境を最大限に活用できます
マルチメディア研修室、天体観測室、プレゼンテーションルーム、スタジオ　など

○ 教育課程の特色

**～ 基礎・基本の徹底から PISA 型学力をはぐくむ探究活動まで、
生徒の個性に応じて、可能性を最大限に伸ばす教育を実践します ～**

生徒の興味・関心、適性等に基づく進路実現に柔軟に対応できるよう、各学年の総単位数を３２単位で構成します。また、基礎学力の定着、さらなる学力の伸長及び円滑な実験・実習活動を図るため、少人数・習熟度別授業を推進するなど多様な教育活動をより効果的に展開します。

〈教育課程特例校〉

平成 22 年８月、文部科学省より、教育課程特例校の指定を受けました

体験授業風景
公民「正義について考える」

指定を受けた特別の教育課程は、次の①、②です。

① 総合的な学習の時間及び特別活動（ホームルーム活動）を行う代わりに、学校設定教科・科目「探究ナビ」に充て、各年次３単位で実施します。「探究ナビ」は、附属高等学校の教科・科目の中核として、人文、社会、自然等の各分野を融合した単元で構成した教科で、知識・技能を活用する力、課題を探究する力、協同的に取り組む態度等を育成し進路の実現を図ります。

② １・２年次生の理科において、物理・化学・生物・地学に相当する学校設定科目を４科目設け、生徒の興味・関心等に応じて、その中から３科目を必履修とします。小・中・高等学校を通じた理科の内容の構造化に対応して、基礎的な知識技能の習得から科学的に探究する能力と態度の育成について、それぞれ具体的な実
践成果を 発信したいと考えています。

（校章の由来）学校の象徴である「学びのクローバー」を中心に据え、生徒の無限大の可能性を切り拓き、夢と志の実現へと導くという理念を表しています。

大阪府教育センター附属高等学校 校章

Ⅱ　開発の実際とその成果

１　開発の実際【研修編】

「コミュニケーション能力を育む教育」研修ワークショップ　【研修編①】

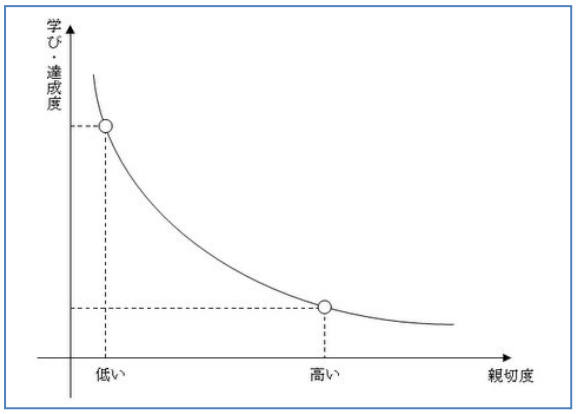
１　日　時　　平成 23 年８月１日（月）　10:00～17:00
２　会　場　　大阪府教育センター　第８研修室（別館４階）
３　日程・内容等

時　間	内容等	講　師　等
10:00～10:05	開会・日程説明	大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室 主任指導主事　天野　誠
10:05～12:00	講義・演習 「コミュニケーションゲーム」	NPO 法人フリンジシアター プロジェクト 蓮行 紙本　明子 中谷　和代
12:00～13:00	休憩	
13:00～15:00	講義・演習 「コミュニケーションゲーム」 ・歩く＆止まる ・物体投げ	NPO 法人フリンジシアター プロジェクト 蓮行 紙本　明子 中谷　和代
15:00～16:50	演習 「創作ワーク１」	NPO 法人フリンジシアター プロジェクト 蓮行 紙本　明子 中谷　和代

８月１日(月)　　１日目　　講義内容

●蓮行術演劇ワークショップ術

□不親切グラフ



ある教育プログラムと受講者の達成度の相関性を示すグラフ。

縦軸に受講者の「達成度」「学び」を取り、横軸に「親切度」（受講者の疑問に丁寧に答える。つまづきに先回りしてケアする。等）をとる。蓮行氏の経験上、そのグラフは図のごとく右肩下がりを描く。したがって、講師は受講者にストレスを与えるべく意図的に分かりにくい説明をし、場合によっては意地悪をしなければならない。講義のつかみとして受講生の学びの自発性を促す演出である。概ね、苦笑でもって迎え入れられる。

□ワークショップ（WS）とは？、WS デザインとは？

確たる定義は無いに等しく、非常に曖昧であるし、その曖昧さがこれまでのスクール型、セミナー型、座学型教育に相対するものとして、意味があると考えられる。だたし血税によってワークショップ教育というものが実施される以上は、市民国民に対する、説明責任から逃れることは出来ない。２００８年度よりの青山学院大学と大阪大学のワークショップデザインに関する共同研究事業においては、ワークショップ型教育を参加型・体験型・双方向型教育と緩やかに定義している。

□モジュール

演劇WSをモジュールとしてとらえる。外部講師を招いて、台本創作から上演までを全て体現すると総合教育として大きな効果を発揮する。これは演劇教育におけるフルスケールのプログラムといえる。しかし、学校現場における様々な制約を勘案するとフルスケールモデルの実装には様々な障がいがあり、それゆえに演劇教育の導入は無理だ。と諦めてしまうケースが多い。しかし、発声練習、コミュニケーションゲーム、インプロビゼーション等、演劇的要素を抽出したモジュール単位（５分～４５分程度で実施可能）のプログラムにも高い教育効果があるので、フルスケールが無理な場合は、モジュールの導入が推奨される。

□バイパス効果

（例１）コミュニケーションゲームによるバイパス効果

男女が入り交じった５人一組のグループを複数作りたい場合、「男女の混じった５人のグループを作って下さい。」とストレートに言うのでは無く、複数のゲームを次々に行い、結果的に男女の混じった５人のグループが出来るようにしていく。

（例２）環境問題の大切さを理解するために、テキストや映像等で直接知識を理解させようとするのでは無く、数時間をかけた演劇創作で環境破壊を行う生活者、環境破壊に苦しむ動植物、未来の人類等の様々な役を設定しながら演劇創作を通じて、理論だけでなく感性や身体を通じて理解させていく。

上記のように「狙い」に向けて直線的に行こうとせず、「急がば回れ」方式で到達させる方が結果的には早く、深く定着する。この作用をバイパス効果と呼んでいる。

●演劇の効果的な教育要素

□メタ視点

鳥瞰視点、俯瞰視点の意。「相手の立場に立つ。」ということだけでは無く、自己と他者を包括した視点を持つことが円滑なコミュニケーションを図る上では重要である。演劇ワークショップでは、演じる際に観客や演出家という絶対者、第三者の目を（例え子どもであっても）自然と意識するようになるので、メタ視点を身に付けるトレーニングとして非常に有効である。

□ピント調整＆共有能力

日本の小学校から大学教育に至るまで、複数の人間が一つの目標に向かって時間管理を含めて自発的、自律的に共同作業をするという機会はほとんど設定されていない。テスト勉強等は、個人単位で行うものであり、学芸会や運動会も学校や教員側が用意した計画に沿って進めて行くケースがほとんどである。つまり、「次に何をやるか（いついつまでにセリフを覚えなさい）」或は、「これをしてはいけない（騒いではいけない等）」という「短期ピント」の活動がほとんどである。長期間のプロジェクトも短期ピントの連続に過ぎない。演劇の場合、本番の上演という最終のミッションに、メンバー全員がピントを合わせ、逆算して物事を協議して決めて行く。（いついつまでにセリフを覚えよう。いついつまでに小道具を用意しよう等）という、長期ピント調整能力を楽しみながら身に付けていくことが出来る。この長期ピント調整能力は社会人にとって必須能力である。

●コミュニケーションゲームの紹介

「歩く＆止まる」

１　準備物：笛

２　対象人数：１５名～５０名

３　ルール

・笛を一回吹いたら教室内を歩き回る。

＊一度歩いたところは歩けない。というルールを学年（特に小学校高学年～中学生対象）によって導入する。

・もう一度笛を吹いたらストップモーションをとる。

・再び笛を吹いて歩く。

・二回笛を吹いたら、２人ペアをつくる。

・再び笛を吹いて歩く

＊一度ペアを組んだ人とはペアにはなれません。

・三回笛を吹いたら３人ペアをつくる。

・４回鳴らしたら…

という風にして、グループをつくり次のワークへと繋いでいく。

４　ファシリテーション方法／目的

ルールを少しずつ増やしてハードルを上げて行くことが重要。ゲーム性を高めることで、子どもたちは楽しく意欲的に参加できる。コミュニケーションゲームのバイパス効果を活用しながら、グループ分けまで行うところが大切である。一度ペアを組んだ人とはペアにはなれません。というルールを入れることにより、普段あまり交流の無い子どもどうしのコミュニケーションの機会を作る。

５　実施上の注意点

・狭い教室なので走らない。
・同じ子どもとペアを作っていても離れるように強制しない。
・「あくまでの『ゲーム』であり、『ルール』を守ることがゲームを楽しむ鉄則である。」ということ理解させる。

「物体投げ」

１　準備物：物体を３個～５個（写真）

２　対象人数：５名～１５名

３　ルール

・円になり、名前（あだ名）を確認する。
・物体（写真）をもった人が、物体を投げたい相手の名前を呼ぶ。
・名前を呼ばれた人は「はい」と返事をする。
・返事が聞こえたら、物体を投げる。
・返事をした人がそれをキャッチする。
・一通り回り、名前が覚えられてきたら、物体を二つに増やす。二つ目の物体は一つ目の物体を投げた同じ相手に名前を呼ばず、アイコンタクトや体を使って投げるよ。という合図を送り、物体を投げる。三つ目以降も同じルールで物体を増やしていく。
※物体を扱っている途中の人は、ボールが受け取れる状態では無いので、名前を呼ばれても、返事をしてはいけない。

４　ファシリテーション方法／目的

・名前を呼ぶ→返事をする→物体を投げる。という順番は丁寧に行う。
・返事を聞かずに投げてしまった物体を床に落としてしまった、という場合は、やり直す。コミュニケーションを丁寧に行うことを重視する。
・慣れてきたらスピードをアップする。
・物体は人数引く１個まで増やすことができる。つねに、「今誰が空いているのか？」「あまり名前を呼ばれていない人は誰か？」ということを考える事が重要となる。「メタ視点」（当事者でありながら、全体を俯瞰してみる力」）を養うことができる。

５　実施上の注意点

・投げる物体は、壊れたり（堅いもの、破れて中身が散らばるもの）扱いが難しもの（ボール等転がって行ってしまうもの）は避けた方が良い。
・名前を一度で覚えれない場合は、何度でも確認してよい。
・一度も名前を呼ばれていない参加者が居ないように配慮する。

創作ワーク１　解説

１　名称　「付箋プレゼン」

２　準備物：２色の付箋（例：青の付箋／黄色の付箋）

３　対象人数：５名～８名×３～４チーム

４　目的

　チームでの合意形成を主眼に置いたワーク。それぞれメンバーが、役割を果たして参加すること（お喋りが上手い人、図を書くのがうまい人等）。プレゼンに向けての逆算ピントカを養うことができる。

５　ルール

・一人にそれぞれ青色、黄色の付箋を一枚づつ配付する。
・青の付箋に「商材、サービス」（例：ダイエット食品／マッサージ／タイムマシーン）を、黄色の付箋に「対象」（OL／力士／小学生）を記入。
・それぞれ見えない状態で壁（黒板、机の上）に貼り、１チームで青、黄色をそれぞれ１枚づつ引く。
・付箋に記載された「対象」に対して、「商材、サービス」を販売する為に、５分のプレゼンをチームで創作する。

（例：「ダイエット食品」を「力士」に販売する為のプレゼン」）

・チームでのプレゼン内容相談タイム：１５分～２０分
・プレゼンタイム：５分
・質疑応答：５分
・採用の有無の結果発表

３チームでそれぞれプレゼンする側、される側を担当する。

例：Aチーム「ダイエット食品」を販売する企業→Bチーム「力士」
　　Bチーム「マッサージ」を提供する企業→Cチーム「小学生」
　　Cチーム「タイムマシーン」を提供する企業→Aチーム「OL」

「コミュニケーション能力を育む教育」研修ワークショップ　【研修編②】

１　日　時　　平成 23 年８月２日（火）　14:00～17:00

２　会　場　　大阪府教育センター　第８研修室（別館４階）

３　日程・内容等

時　間	内容等	講　師　等
14:00～14:05	開会・日程説明	大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室 主任指導主事　天野　誠
14:05～16:50	講義・演習 「創作ワーク２：シナリオづくり＆小発表会」	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト 蓮行 紙本　明子 中谷　和代
16:50～17:00	アンケート・諸連絡	大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室 主任指導主事　天野　誠

●創作ワーク２　解説

１　名称　付箋プレゼン発展版

２　目的

チームでの合意形成力／タイムマネージメント力／意見を言い合える環境を整える力を養う。

３　ルール

・１チーム　５人～１０人

・前日に行った「付箋プレゼン」で引いた付箋を使って、１０分程度のシーンをつくって上演する。お芝居はプレゼン劇でも良いし、全く違うシーンのお芝居でも良いが、付箋プレゼンのキーワードを使用すること。

・全員が出演すること

例：ダイエット食品を開発している、元力士の感動秘話。

「コミュニケーション能力を育む教育」研修ワークショップ 【研修編③】

１　日　時　　平成 23 年８月４日（木）　14:00～17:00

２　会　場　　大阪府教育センター　第８研修室（別館４階）

３　日程・内容等

時　間	内容等	講　師　等
14:00～14:05	開会・日程説明	大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室 主任指導主事　天野　誠
14:05～15:30	講義・演習 「創作ワーク２：上演」	NPO 法人フリンジシアター プロジェクト 蓮行 紙本　明子 中谷　和代
15:30～16:50	発表会・講評（講義を含む） ・チームでふりかえり ・「学校で演劇ＷＳをするなら…」 ・ＭＶＰの発表	NPO 法人フリンジシアター プロジェクト 蓮行 紙本　明子 中谷　和代
16:50～17:00	アンケート・諸連絡	大阪府教育センター 教育課程開発部 カリキュラム研究室 主任指導主事　天野　誠

●作品発表

●振り返り

・各チームで自分たちの内容の振り返りと相手チームの演劇の評価

●講義

・今回のプログラムの難易度は、高校生にも実施可能な内容である。

・どのような意思決定で演劇を創作していくか、生徒に選ばせる。

民主的に話し合いでつくる、もしくは独裁的（間接民主制）につくる。

・大学生、民間企業に対するワークショップでは、予算書作成も含めた、会社プレゼン劇を考えさせて採算がとれる商品企画の開発等、バックボーンのあるプログラムと劇を作ってもらう。

・「共同注意」

レクチャーの為し手、受け手は双方で同じ方向を見る方が、信頼関係が築きやすい。　（教育心理学）　Ex.　読み聞かせ

・学校で演劇的手法を使った授業を実施する場合、コミュニケーションテティーチャーを招くと教員と生徒が信頼関係を築きやすい。

２　研修編における効果測定

●「コミュニケーション能力育成に関する教育」教員研修事前・事後アンケート結果

初日 8/1(月)受講者数 25 名(小:３、中:４、高:14、支援:４)

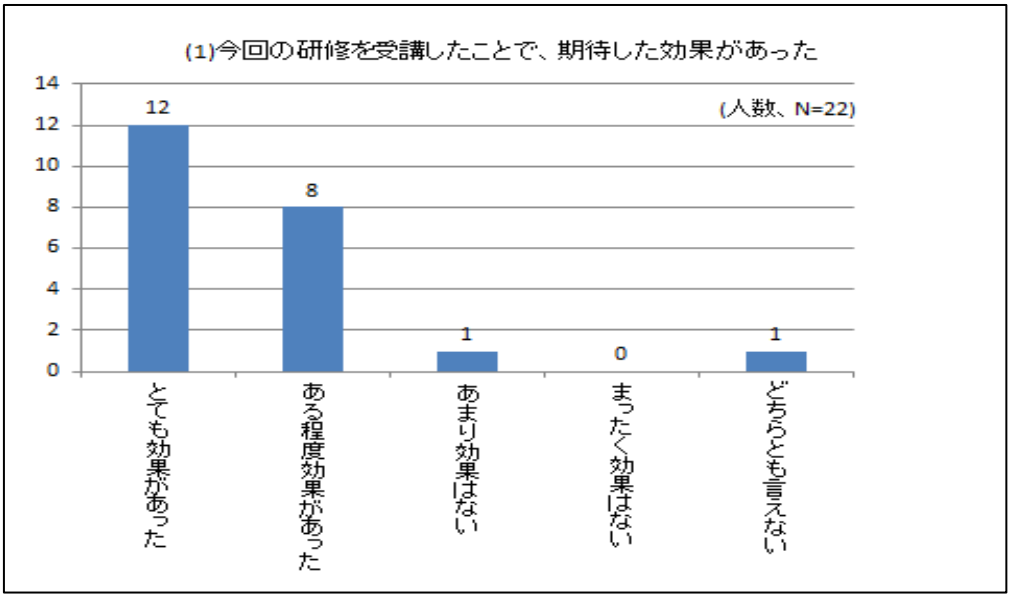
問１　どのような目的で（どのような効果を期待して）研修を受講されましたか。(受講前記述式・
複数回答可)

項目	人数
①子どもたちに演劇の楽しさを体験して欲しいから	７
②子どもたちの創造力・想像力やコミュニケーション能力をはぐくむことを期待して	18
③子どもたちが表現する楽しさや喜びを実感できる機会となることを期待して	13
④子どもたちに一つのことをみんなで成し遂げる充実感を感じて欲しいから	10
⑤子どもたちの学校生活に変化をつけるため	２
⑥総合的な学習の時間の教育目的にふさわしいと思ったから	６
⑥以前から、演劇を授業に取り入れてみたいと思ったから	６

⑦その他：

- 年に１回行われる学習発表会での演劇指導の中で、何かアドバイスになるようなことがあればと思った。
- 総合な的な学習の時間どのまとめ発表を、演劇でやってみたりすることは多いが、より「みせる表現」というものをきちんと学んでみたい。
- 演劇部指導に役立てたいと考えたから。
- 学生の時より現在に至るまで演劇と関わっており、教育における演劇のもつ可能性を強く感じている。
- 授業はグループワークを柱に進めたいので、そのワークが充実したものになるように。
- 今後、生徒たちにとって必要な能力であるため。
- 自分自身の精神的刺激！再教育のきっかけが必要であると感じている。
- クラブ活動以外の場面で、演劇の楽しさを感じてもらいたいと思ったから。
- 今まで、授業で古典を劇にしたり、生徒参加の授業をめざしてきたが、私が演じるだけでなく、生徒も参加し、一体となって進める授業をめざしたいから。
- 自分を表現することにより、自信をもつのではという期待がある。
- 総合的な学習の時間でコミュニケーションについての講座を担当しており、そこで活かしたい。
- コミュニケーション力を伸ばすにあたり、演劇的手法というのがどういった効果があるのか興味がある。
- 国語の授業で実践したが、なかなかうまくいかず、手法を学びたいと思った。
- 担当している生徒のコミュニケーション力を向上させたいから。

問１　今回の研修を受講したことで期待した効果はありましたか。(受講後)



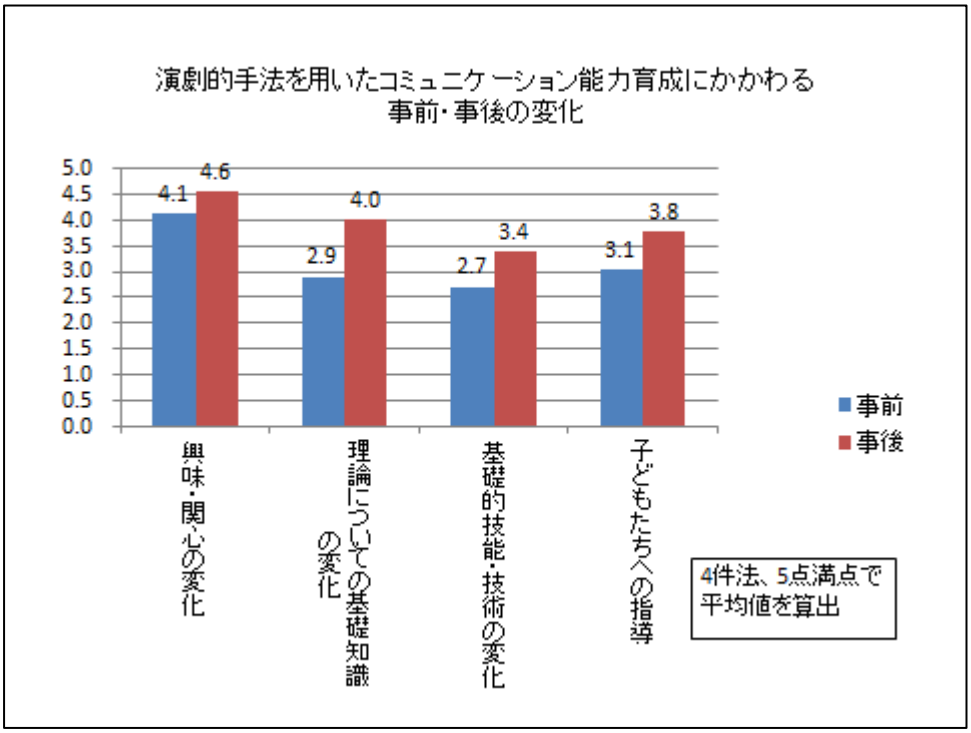
★問２～問５については受講前後の結果を比較する(4 件法、５点満点で平均値を算出する)

問２　演劇的手法を用いたコミュニケーション能力育成について、興味・関心がありますか。

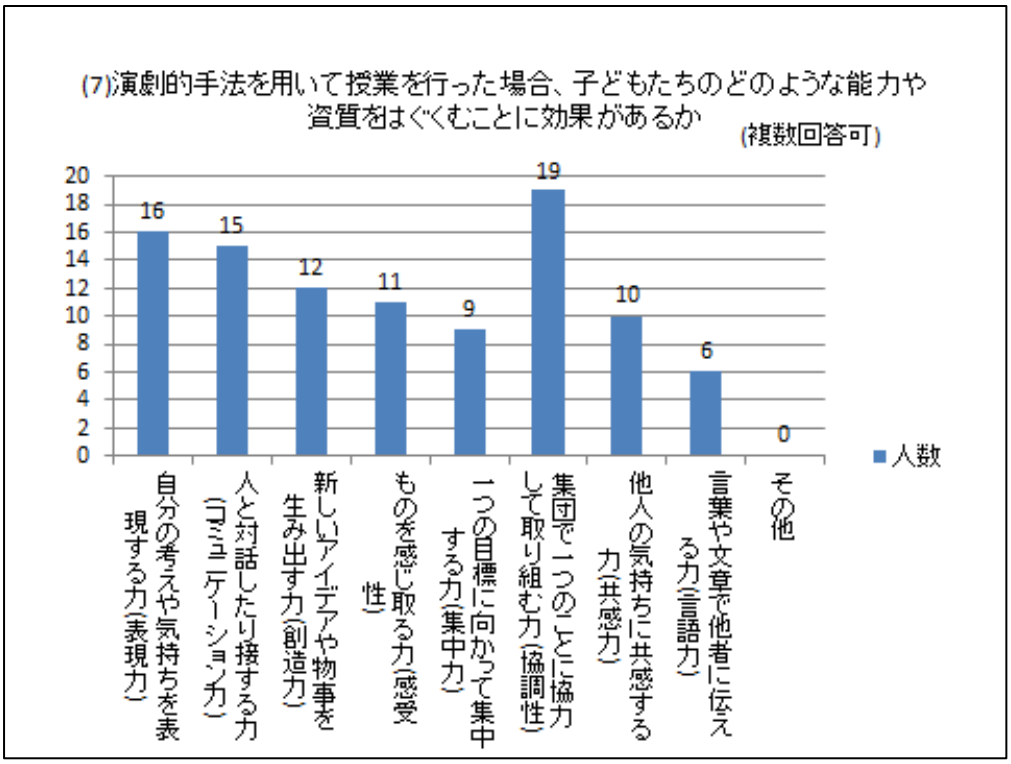
問３　演劇的手法を用いたコミュニケーション能力育成について、基礎知識はどの程度ありますか。

問４　演劇的手法を用いたコミュニケーション能力育成について、基礎的技術・技能はどの程度ありますか。

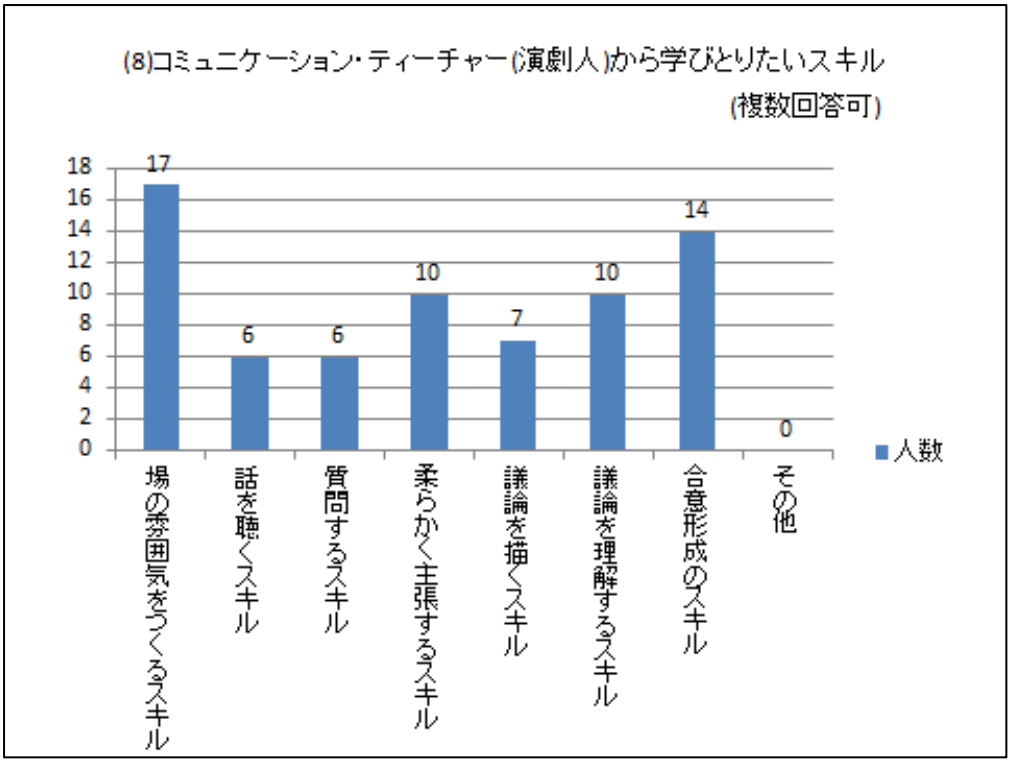
問５　受講した演劇的手法の基礎的技術・技能を用いて、各教科や特別活動等で子どもたちを指導することができる。



問６　コミュニケーション能力の育成をめざして、演劇的手法を用いて授業を行った場合、特に子どもたちのどのような能力や資質をはぐくむことに効果があると思われますか。（複数回答可）



問７　コミュニケーション・ティーチャー（演劇人）から学びとりたいスキルは何ですか。（複数回答可）

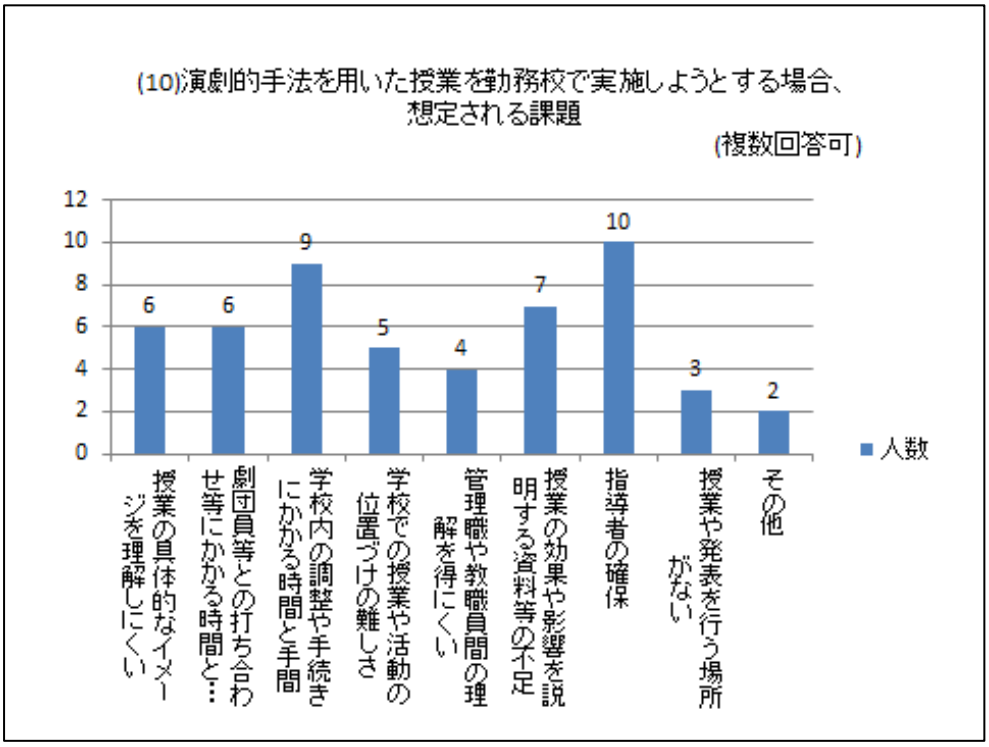


問８　演劇的手法を日々の学校の教育活動（授業や学級経営等）に取り入れた場合、どのような効果をもたらすとことができると思いますか。（自由記述）

初めての経験で学ばせて頂くことがたくさんありました。コミュニケーション能力の育成に使えそうなアイディアをいただき今後の学級経営や学習に活かしていきたいと思います。
私が思っていた講義内容とちがったのですが、「なるほど」と思うワークショップも多く、「学校・学級で取り入れてみよう」と思うものが多くありました。また、日ごろあまり接することのない異校種の先生とも話せ、刺激になりました。
２日目の作品づくりに参加できなかったので悔いが残った。
現場では文化祭（クラス劇）を教員が嫌う、めんどうくさがる傾向にあり、授業時数の確保という点から、縮小したいという考えも根強い。今回のような視点で演劇的手法を取り入れることで、文化的行事をカリキュラムの中に再編成できるのではないかと思った。そうすれば、行事の面へも視点を広げることができると感じた。
とても楽しい研修だった。実際に使えそうな例をたくさん教えて頂けてよかった。普段の授業ではなかなか経験することのない他人と目をあわせることや何かを作りあげる達成感や自分のアイデアを実現することの楽しさなど、いろんなことを学べる機会になった。すぐにとりいれるのはむずかしいかもしれないけど、とりいれていければと思う。
昨日管理職より一体どのような内容なのか問われ、実際「演劇」というものの可能性（教育における）がまだまだ広く認識されていないことを知るところとなった。だが、子どもたち（中学生）は興味をもつ者も多く（普段コミュニケーションを苦手とする子どもたちでも）文化祭等でその魅力に、はまる子たちもいる。鑑賞する大きな意味をもつと思う。もっともっと多くの教員に知ってもらいたい。
家庭科が目標にしていることと合致することがたくさんあったので勉強になった。
受講前にどの程度の評価をしたかはよく覚えていませんが、どの項目もヒントを得たと思う。私自身は、教員ではあるがアドリブができないほうなので、もっとこういう研修で自分を磨く必要性を感じている。面白い研修だった。
楽しい研修だった。３日間参加できなかったのが、本当に残念である。立場も忘れ、色々な学校の先生が集まる機会はないので、そういう意味でもよい機会だった。
理論がよくわかったのでとてもためになった。今まで演劇の場で、ゲームのようなことをしたが、今ひとつ意味がわからなかったので、今回納得できた。
かつて生徒会担当をしていたので、非常に興味があった。最初の「歩く止まる」ゲームや、「ボール投げ」ゲームも生徒だけでなく様々な場面で使えると思った。生徒とコミュニケーションをとる、生徒どうしでコミュニケーションさせる、どちらも「コミュニケーション力」だが、内容は異なると気付かせてもらった。やはり教員としては生徒どうしのコミュニケーション力を身につけさせたい、身につけてほしいと感じた。声かけなどの言葉だけで生徒と関わるのではなく、もっと身体表現やゲーム、演劇など言語外でも生徒と関われるようになりたい。
ファシリテーターをしてくださった劇団の皆さんの姿勢が勉強になった。

実体験としてワークショップを受けることができてよかった。**次はワークショップデザインの技法を学べる研修が受けたい。**
タイトルから、どんな研修なのだろうと興味をもって参加した。自分は支援学校に勤務しており、**今回の内容をそのまま生徒に反映させるのは無理があるが、指導をする上で教員がもつべき視点や考え方のヒントをたくさんもらった。**
一学期に私が国語の授業で取り組んだ「コミュニケーション学習」と「音読から朗読群読の学習」に継ぐものを模索していた。２学期の国語がおかげで定まったような気する。蓮行先生をはじめ、女性のお２人の気配り、気づかいが心にしみた。
２日間の研修を通して、**コミュニケーションゲームや劇つくりをみんなで一緒に取り組めたことは、とても良かった。**初対面だった先生と話をしたり、ゲームをすることで、**同じ方向をむいて 10 分劇を演じることができた。楽しかった。**いろんな場面で、この体験を生かしていこうと思う。
演劇を通してということだったので、もっと理論的な研修だと思っていが、ワークショップ型だったので、**自分も体験できて、よりわかりやすかった。**

問 10　今回のような演劇的手法を用いた授業を勤務校で実施しようとする場合、想定される課題は何ですか。（複数回答可）



●「コミュニケーション能力育成に関する教育」教員研修５カ月後アンケート結果

問１　本研修終了後、研修成果を活用しましたか。

①　はい　　②　いいえ

	は　い	いいえ
小学校	２	１
中学校	３	０
高等学校	７	５
支援学校	３	０
合　計	15	6

問２　問１で「いいえ」とお答えの方にお尋ねします。

活用できなかった理由をご記入ください。

（小学校）
・２学期は行事が多く、ＷＳを取り入れた取組をしている時間がなかったため。
（高等学校）
・教科会（国語）で研修内容を報告し、演劇を授業にどう取り入れていけばよいか、意見を聞いた。
・直接的に活用できる機会はなかったが、集団として、何かに取り組むときの心構えやテクニックは非常に参考になり、自分の考え方も影響も受けていると思う。
・本校の生徒向けにアレンジすることの難しさ。
・活用する場や時間を持てなかった。
・研修内容を学年内で共有する時間が持てなかった。また、取組としても１時間の授業でなどと思ったが、カリキュラムに入れる余裕がなかった。生徒の実態や学齢に合わせたプログラムづくりがまず必要だと思った。
・担当の教科（家庭基礎２単位）の授業時間数に組み込む余地がなかった。文化祭で教員チームが舞台に立つ話題を科内で挙げたのですが、賛同を得ることは難しく、消滅しました。

問３　問１で「はい」とお答えの方にお尋ねします。

学校でどのように研修成果を活用しましたか。該当するすべての項目にお答えください。

①　校内の研修会・報告会等で研修成果を報告

具体的に

（小学校）
・研修成果をまとめ、報告した。
（高等学校）
・具体的には活用できていないが、いずれ授業で実践していきたいと考えている。
・研修会というようなものではないが、若手教員に伝達、広報をした。

② 校内での活用

具体的に（例:総合的な学習の時間で〇〇を行った。）

（小学校）
- 学習発表会での劇の指導。

（中学校）
- 文化祭の舞台発表の取組で学年劇を行った。

（高等学校）
- 中学生向けのオープンスクールにおけるクラブ体験で。中学生と在校生のコミュニケーションをとるため、ロールプレイ等を行った。
- 総合的な学習の時間（コミュニケーションアワー）でボール投げを行った。
- 人権委員会で生徒の活動支援の際、生徒の人権委員が人権行事（多文化共生）で留学生を迎えるにあたり、ファシリテーター役をする。その事前学習でアイスブレイクやワークショップの進め方を指導する際、活用した。

③ 担当する教科・科目や学級活動等での活用

具体的に

（小学校）
- 学級でコミュニケーションゲームを行った。

（支援学校）
- 授業計画を立てる段階で、生徒の動きにバイパス効果を狙った流れを盛り込むように意識した。
- 生徒の名前を呼び、あいさつの練習をさせる際に研修でのツールを使った。名前を呼んで「はい」と返事をさせるだけでなく、キャッチボールを加えた。そのことによって、子どもたちの意識が向上し、タイミングよい返事がかえってくるようなった。今後も活用したいと思っている。
- 国数の授業で活用。音読の前にウォーミングアップとして、「ワンジャンプ～あくび卵発声」を実施。お腹から声がでるようになった。
- 体験授業で、「シアターゲーム」を実施。ボールをキャッチするのが難しい生徒がいたが、楽しんで取り組んだ。相手の目をじーっとみて言葉を発するということがないので、生徒たちにとっては新鮮だったようだ。後の授業では、発言する生徒が多かった。

（高等学校）
- 保健のロールプレイングで「健康のための”行動選択・意思決定”」、少し表情やジェスチャーを取り入れることで内容を楽しみつつ深める雰囲気づくりに利用している。
- 家庭科の授業では、ワークショップ多用しているので、いろいろな場面で活用が可能だった。指導者としての姿勢、アイスブレイクの選び方や進め方、発表する場合の表現の仕方などたくさん参考になった。

④　その他

具体的にご記入ください。

（小学校）
・研修会のデザイン方法が勉強になった。そしてその考え方を校内研修会で使った。
（高等学校）
・研修に参加する前から、「古典をより身近に」をテーマに、教科書本文を群読したり、寸劇を生徒に行っていた。この研修で、生徒に声かけをしすぎてもいけないこと、自主性を信じて待つことの大切さも学ぶことができた。現在は、現代文を担当しているので、実践が難しいが、今回の研修内容を生徒に還元していきたいと考えている。
・特に保健の授業での利用には、有効な一つの方法と実感した。ただ、隣接する教室に「さわがしい」というストレスを与えてしまう可能性はある。

問４　研修成果の活用に当たって、どのような点が今後の課題と考えられますか。（当てはまるもの全てを〇で囲んでください。）

①　研修内容の充実・改善を図るべきである。
②　研修活用に当たって利用できる教材・資料等が不足している。
③　受講生どうしが相談したり、講師等からアドバイスを受けたりできる環境が必要である。
④　成果を活用する機会がない。
⑤　その他（改善案等をご記入ください。）

	① 研修内容の充実・改善	② 教材・資料等の不足	③ 相談したりアドバイスを受ける環境不足	④ 成果を活用する機会がない	⑤ その他
小学校	0	1	0	0	1
中学校	0	1	2	1	0
高等学校	1	1	2	1	6
支援学校	1	2	1	0	0
合　計	2	5	5	2	7

（小学校）
・コミュニケーションティーチャーの派遣の充実。
（高等学校）
・センター附属高校の受講者が、演劇の授業をどのように実践されているのか、生徒にどのように還元しているのかを是非教えていただきたい。（附属高校以外でも）もし実践された教員がいるなら、どのような実践内容だったのか、また取り組み方などに強い興味を持っている。
・二日半では、研修期間として短いのではないか。興味深い内容なので、もう少し長い期間でじ

っくり学べればよいと思います。芝居作りの中での人と人とのつながりや在り方に対する考え方は、学校の中でも必要なことだと感じている。
・コミュニケーションゲームの手法を定着させるために、複数回に分けて、研修を繰り返した方がよい。
・研修内容を共有しやすい資料や学齢や活動場面に合わせたプログラム例が欲しい。また、市長村等でも同様の研修を広め、研修内容を理解した人を増やすことによって活用しやすくなると思う。
・受講者（センター附属以外）のその後を知りたい。研修内容はわたしにとっては濃密だった。（構成も良かった。）「即」の活用はできないが、いつかは生徒に伝えたいと思っている。
・指導にあたって簡単なキーワードのみいただいたが、もう少し丁寧な資料をいただけると有難い。体験できるだけで十分といえばそれまでだが、その後の活用を考える時、資料があれば促進される。

Ⅱ　開発の検証（実践・実証研修編）

・対象校　　大阪府教育センター附属高等学校
・対象生徒　　第一学年　7 クラス　237 名
・指導者　　研修編受講者教員 4 名・協力教員 2 名　　フリンジシアター関連劇団関係者 6 名
・特別審査員　大阪大学教授　平田オリザ
・実施時期　　11 月～2 月（週 1 回・2 時間）
・指導授業　　金曜日の 2 時間連続の「探究ナビ」（生徒の自立的な活動をもとに、思考力・判断力・表現力を培う学校設定科目）の時間に 2 クラスもしくは 3 クラス単位で実施する。クラス内を小グループに分け、夏にコミュニケーション能力育成に係る研修を受講した教員が指導する。生徒は下記のテーマの中から一つ選び、そのテーマに沿って脚本を作成し、劇団からも指導を受けながら発表する。
・テーマ　　年間の「探究ナビ」の時間に行った次のテーマのいずれかを選び、脚本を作成しグループ全員で演ずる。

・震災について
・将来の職業について
・商品開発（ＮＴＴドコモと連携し、携帯電話の開発）について

●実践検証協力校における年間の探究ナビ（実証検証の時間）の概要

「探究ナビ」は、附属高等学校の教科・科目の中核として、人文、社会、自然等の各分野を融合した単元で構成した教科で、知識・技能を活用する力、課題を探究する力、協同的に取り組む態度等を育成する学校設定科目。

【目的】

探究ナビの時間において 11 月から始まる演劇に関する取組を年間のコミュニケーション能力育成プログラムの総まとめとして教育課程に位置付ける。それまでの授業を通して、「聴く力」、「質問する力」、「説明する力」、「協同する力」の４つの基本的な力を身に付け、生きる力の基盤となるコミュニケーション能力を養う。

【具体的な取り組み】

・ブレーンストーミング、ＫＪ法などの技法を通じて課題を整理、発見する手法を身に付ける。
・効果的なインタビューの方法を学び，相手から問題を引き出す力を身につける。
・グループ活動を通じて他の人たちと協力して課題を解決する方法を学ぶ。またグループ内での自分の役割を自覚して行動する力を付ける。
・演劇的手法を通じて、相手の気持ちを考えるとともに、自分の気持ちを効果的に伝える手段を身に付ける。

【年間の授業の概要】

月	目標	授業の内容
４月	【聴く力を身に付ける】 ・自分を伝えよう ・友達とつながろう	自己紹介シートを使い、効果的に自分を伝える方法を身に付ける。同時に指定された友人を紹介するインタビューシートを完成し、友人を紹介する。遠足での活動で友人と一致協力することの大切さを体験する。
５月	【聴く力を身に付ける】 ・協力して考えよう ・分担して調べよう	班単位での活動を行い、ブレーンストーミングとＫＪ法による問題点の整理方法を学ぶ。最終的に班単位に課題を見付け，課題解決に向かい学習を行う。 大阪府立中央図書館で調べ学習の基本について専門家から教えていただく。
６月	【聴く力を身に付ける】 ・調べた事柄を伝えよう	体育祭終了後、５月の活動で行った調べ学習の結果をプレゼンテーションする。様々なグループの発表を聴き、生徒間で相互評価をする。
７月	【調べる力を身に付ける】 ・調べた事柄をまとめよう	６月のプレゼンテーションで得た評価をもとに、調べ学習の内容をレポートにまとめる。

８月	【調べる力を身に付ける】 ・将来を考えよう（１）	夏休みの課題として「大学・職業」などを調べる取り組みを行う。
９月	【調べる力を身に付ける】 ・将来を考えよう（２）	図書館・進路指導室・インターネットなどを活用し、夏休みの課題であった進路調べ」をさらに進める。
10月	【説明する力を身に付ける】 ・将来を語ろう	商品開発プロジェクトを行う。与えられたテーマに沿って問題点を出し合い，自分たちにとって魅力のある商品をえる。 開発した商品についてプレゼンテーションを行う。クラス毎に優秀な商品を選び，全体で発表会を行う。なお、指導に当たっては現場で商品開発を行っている企業の方を講師・アドバイザーとして招く。
11月～２月	・【協力する力を身に付ける】 ・効果的に伝えよう	演劇的手法を使い、表現する方法を学ぶ。講師として演劇活動を実践している方々を招き、その助力を受け、計画的・継続的なワークショップ等の実技指導を行う。豊かな情操を養うとともに、生きる力の基盤となるコミュニケーション能力（「聴く」「質問する」「説明する」「協同する」力）の育成を図る。グループに分かれ、テーマ(年間の探究ナビの時間に学んだことからグループごとに選択する。）を設定し、演劇として組み立てる。グループごとに作成した台本を元に演劇を完成する。クラス単位で代表グループを選抜し、本番の発表会に臨む。審査を行い、優秀作品の発表を全体で行う今年度の総括を行い、２年次での活動の準備を始める。

● 演劇的手法を使ったコミュニケーション能力の育成の授業計画（網掛部分は劇団が来校）

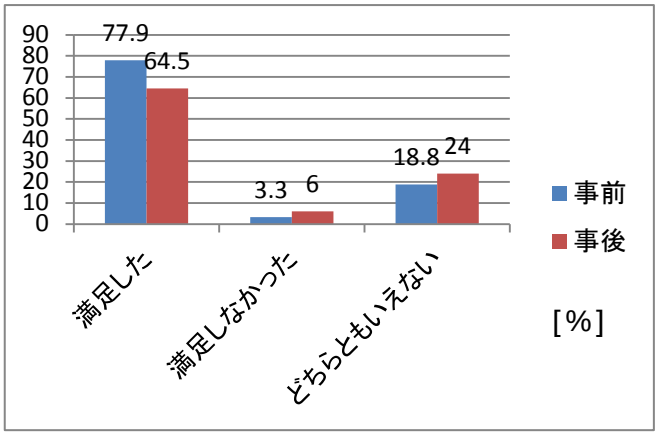
日　程	内　容	
11 月 11 日	デモンストレーション・基礎ワークショップ	○劇団によるデモンストレーション ○コミュニケーションワーク ○グループ分け ○テーマの決定 ○台本づくりに向けて、宿題の提示　⇒　１人一作 ○事前アンケート実施
11 月 18 日	台本作成(プロット作り)	○各自が持ち寄った宿題をもとに、グループでプロットを作成する(時代背景、いつ、場所、登場人物、出来事、起・承・転・結等) ・芝居の作り方について解説 ・ワークシートに沿って、グループで活動
11 月 25 日	台本作成(一人ひとりの中に生じた問題意識を創作という作業を通じて、友人と対話しながら深める。)	○コミュニケーションゲーム後、グループで台本作成 ・１チーム５分くらいの面談形式…順番に相談に行く 台本が早くできたチームは振付・立ち稽古へ
12 月 2 日		○コミュニケーションゲーム後、グループに分かれて台本作成 ○台本の中身を深めるための指導、材料の提供等を行う ○台本を覚える宿題を出す
1 月 13 日	仲間とのコミュニケーションを取りながら演技の稽古	○台本作成の進捗状況(完成の度合い)の確認 ○未完成のグループがあっても、体を動かしながら台本を作る→　立ち稽古の指導を教員で
1 月 27 日		○通し稽古…グループ別に指導

2 月 3 日		○さらなるブラッシュアップ
2 月 10 日	オーディション・予選会 (教育センタースタジオ等）	○スタジオ、５研、６研→終日 ○審査基準に則り、各クラスから１チームを選出 (上演時間 10 分×７チーム)
2 月 12 日	本番　教育センター大ホールでの発表	○当日の流れ 9:30　　スタッフ集合 10:00ー12:00　演劇上演(12:00ー13:00　昼休み) 13:00ー15:00　平田オリザ氏　講評&講演

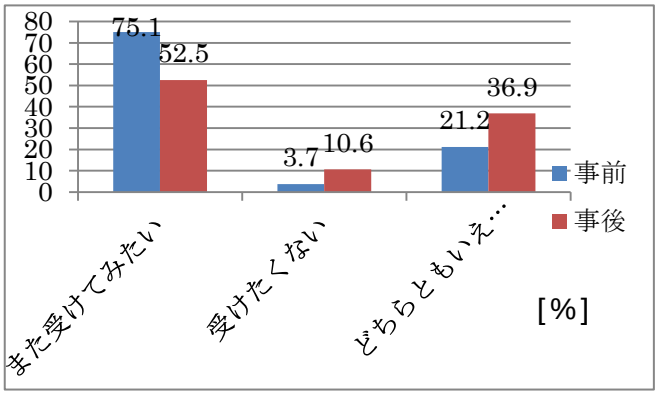
４　実践編における効果測定

・対象校　　大阪府教育センター附属高等学校
・対象生徒　　第一学年　７クラス　237 名
・事前アンケートは１回目終了後、事後アンケートは全体発表後に取った。

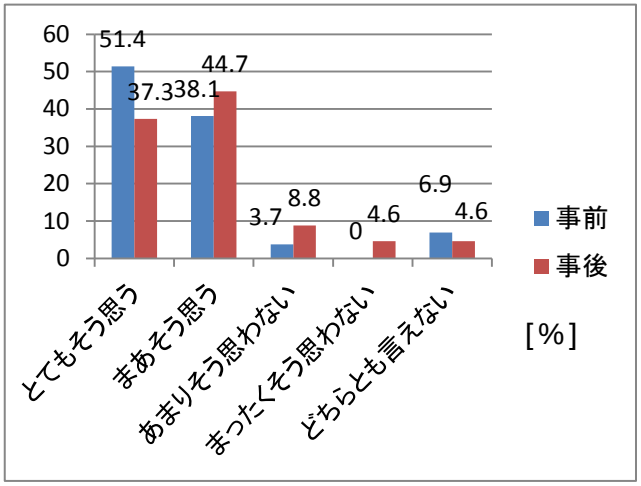
問１　今回の演劇の授業は満足しましたか。



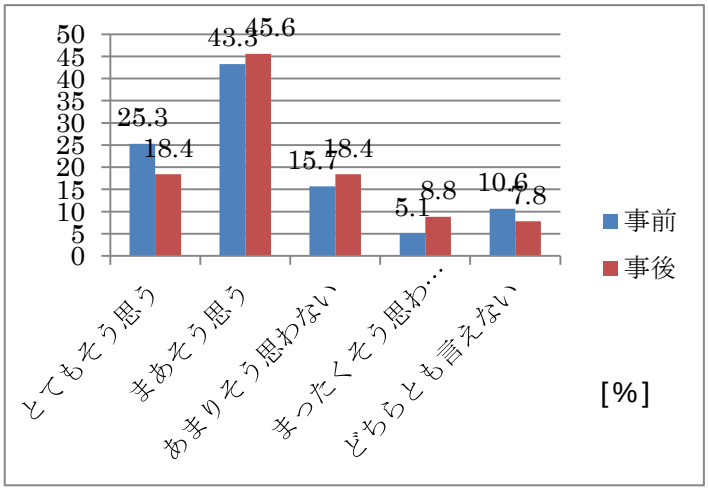
問２　今回のような時間を、これからもまた受けてみたいと思いますか。



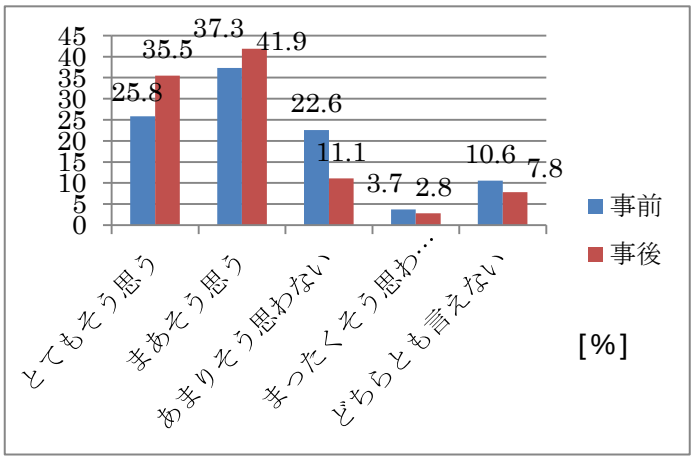
問３－１　芸術家など外部講師の先生に教えてもらって、その時間が おもしろかった。



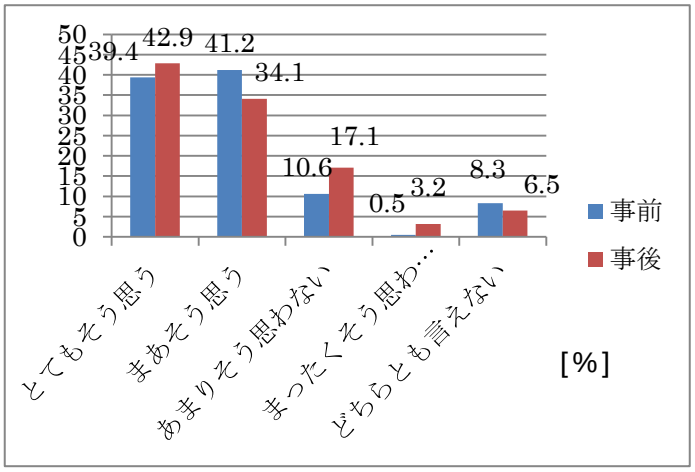
問３－２　声を出したり、体を使ったりしながら自分の気持ちなどを表すことが 楽しかった。



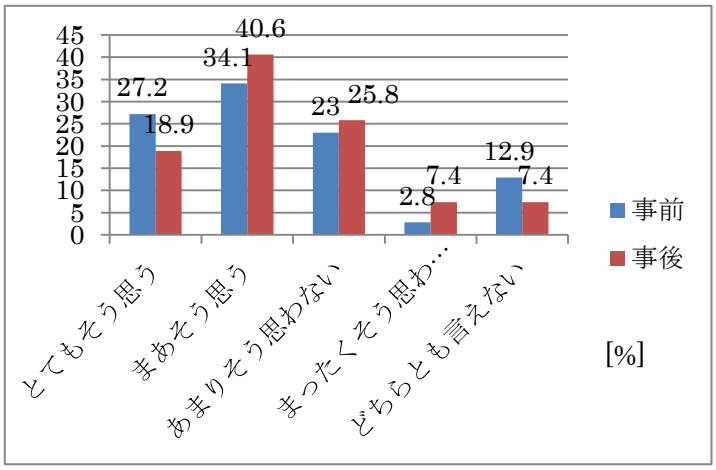
問３－３　いつもとは違うみんなの様子を見つけることができてよかった。



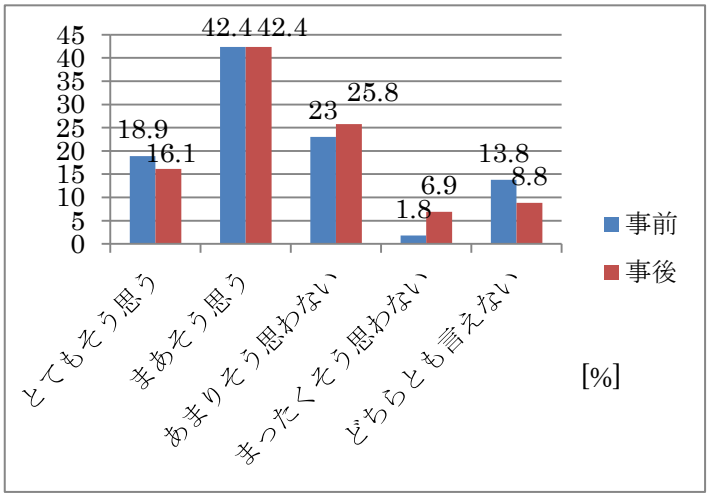
問３－４　みんなと力わ合わせて取り組むことが楽しかった。



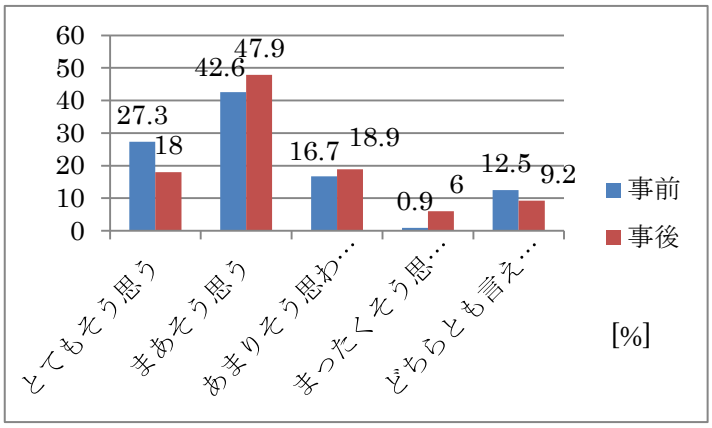
問４－１　今までよりも、授業中に質問や意見を言うのが恥ずかしくなくなると思う。



問４－２　今までよりも、自分のすることや言うことに自信がもてると思う。



問４－３　今までよりも、いろいろなことに興味や関心をもつようになると思う。



５　コミュニケーション教育に係るシンポジウム

平成 23 年度　大阪府教育センター　研究フォーラム　B-7 分科会
平成 23 年 12 月 26 日（月） 13 時 45 分 ～ 16 時 45 分　本館3階 スタジオ

● *演劇的手法を用いた コミュニケーション能力の育成*

13:45　◇開会挨拶・講師紹介
　　大阪府教育センター　教育課程開発部　カリキュラム研究室長　蛭田　勲

13:50　◆講演 「コミュニケーションティーチングの可能性」
　　蓮行 （大阪大学特任講師）

14:30　◆演劇ワークショップの体験
　　蓮行 （大阪大学特任講師）　紙本　明子 （大阪大学特任研究員）

15:30　◆平成 23 年度小学校・中学校・高等学校「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修報告
　　大阪府教育センター　教育課程開発部　カリキュラム研究室　指導主事　岡本　真澄

15:40　◆実践発表
　　木村　伸司 （大阪府教育センター附属高等学校）
　　吉田　美彦 （大阪府立北摂つばさ高等学校）
　　◇質疑応答

16:30　◇まとめ 「今後の方向性について」
　　大阪府教育センター　教育課程開発部　カリキュラム研究室　主任指導主事　天野　誠

16:45　◇閉会挨拶
　　大阪府教育センター　教育課程開発部　カリキュラム研究室長　蛭田　勲
　　◇アンケート

●考察

上記の内容で実施し、府内の小中学校、高等学校及び支援学校から 70 名程度の教員の参加があった。夏に実施した研修を縮小した形で行ったが、参加者の反応はよく、コミュニケーション能力の育成が各校において喫緊の課題になっている現状がうかがえた。

夏にはなかった取組として、十数年前より選択授業の中で演劇を授業に取り入れている吉田美彦指導教諭の実践事例発表を行った。先行事例として資料編に添える。

６ 「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修評価の分析及び改善

本研修は、本事業の趣旨に基づき、教員が研修を受講し、その後研修を受講した教員が学校にて、受講した研修内容を実際に生徒対象に実践するという形態で行った。評価に関するアンケートは教員対象研修の事前・事後及び実証検証の生徒用事前・事後及び教員用事後の計 5 回取っている。そのアンケートに基づいて成果等を分析した。

（1）研修編アンケート調査分析

●研修受講者による事前・事後アンケート調査結果(4 件法、5 点満点で平均値を算出)

① 高まる興味・関心

演劇的手法を用いたコミュニケーション能力の育成についての興味・関心度は、受講前に「やや高い、最も高い」を合わせて 4.1 であったが、受講後は 4.6 になり、実際に体験することによって、興味・関心度が高くなった。

② 向上した基礎知識及び基礎的技能・技術

演劇的手法を用いたコミュニケーション能力の育成についての基礎知識は、受講前の 2.9 から受講後は 4.0 となり、また、基礎的技能・技術は、受講前は 2.7 から受講後は 3.4 となり、３日にわたる受講により、基礎知識が深まり、基礎的技術・技能が身に付いたことがわかる。また

子どもたちに対する指導項目においても 3.1 から 3.8 へと数値が上がっており、指導に対する自信が深まっている。

③ 育みたい協調性・表現力

演劇的手法を用いて授業を行った場合、特に子どもたちのどのような能力や資質をはぐくむことに効果があると思われますか、という問いに対して、集団で一つのことに協力して力（協調性）や自分の考えや気持ちを表現する力（表現力）、人と対話したり接する力（コミュニケーション力）など人間関係を調整するために重要な要素が高い割合を示しており、学校現場においてこれらの力をつける具体的なプログラムの構築が喫緊の課題となっていることがうかがえる。

④ 演劇人から学び取りたい雰囲気づくり

演劇人から学び取りたいスキルとしては合意形成のスキルや場の雰囲気づくりのスキルなどの割合が高く、授業づくりのみならず、学級経営の点などにも演劇人のスキルが生かせることがうかがえる。

⑤ 授業を実施する場合の課題

演劇的手法を用いた授業を勤務校で実施しようとする場合、想定される課題としては指導者の確保と学校内の調整や手続きにかかる時間と手間が高い数値を示している。予算面の裏付けと演劇の効果に対する理解が不足しているのであろう。

●5 か月後アンケート調査結果（21 名から回収）

① 幅広い活用法

70%以上の方が何らかの方法でこの研修の成果を活用していた。活用の方法としては文化祭の演劇指導、授業におけるウオーミングアップ、ワークショップにおけるファシリテーター等、多岐にわたっている。

② 授業を実施する場合の課題

・研修成果活用に当たっての課題としては、教材・資料の不足や講師等からのアドバイスを受けたりする環境の不十分さ、などがあげられている。

・活用できなかった理由としてはカリキュラムに入れる余裕がない等の時間の不足、またどのように演劇を授業の中で取り入れるか不明などがあげられており、校内の理解を得るためには効果の実証等の活動が必要である。

（2）実践編アンケート調査分析

●研修を受講した教員が、実際に自校にて生徒対象に行った実践編（生徒 237 名）のアンケート調査結果（事前アンケートは 1 回目の授業終了後、事後アンケートはクラス単位の全体発表 4 日後のホームルームの時間にとった）

★生徒編

① 倍増する演劇への関心

この取組を機会に演劇をしたり、舞台で発表を見たりした生徒は 10%から 20%に倍増しており、演劇文化への関心は深まったと言える。

② 主体的に取り組めた学習活動

1 回目の授業後と最終の舞台発表後のアンケートの回答傾向として顕著に表れている点がある。問１「今回の演劇の授業に満足しましたか」77.9%→64.5%、問２「今回のような時間を、これからもまた受けてみたいと思いますか」75.1%→52.5%、問４「芸術家など外部講師の先生に教えてもらってその時間がおもしろかった」51.4%→37.3%、問５「声を出したり、体を使ったりしながら自分の気持ちを表すことが楽しかった」25.3%→18.4%といずれも減少している。もともと期待度が高かった項目もあるが、アンケートのこの差は一体どうしてであろうか。1 回目は劇団に来てもらい、デモンストレーションとコミュニケーションゲームという生徒は観客として見ていられる立場であった。だが 2 回目以降はシナリオづくりが入ってきて、受け身の立場ではいられなくなった。シナリオ作りを通して、グループ内に様々な軋轢が生じたようである。配役の決定、進まない脚本、活性化しない話合い。そんな中で発表の日時だけが迫って来る。そのことへの焦り。生徒にはかなりの負荷がかかっていた。その証左としてアンケートの記述項目の欄に「最初よりみんなの仲も深まってよかった」「滅多にできない貴重な経験だった」と言う意見の一方で、「ストーリーの方向性が決まらず、大変だった」という意見や「劇を考えたりするのは楽しかったけど大変で、あまり協力的でない人や自分の意見を言わない他人任せな感じの人がいると、完成しないので、もうあまりしたくない」といった意見に表れている。

これまで、生徒たちの学習活動は受動的なものが多く、主体的に取り組んだり、人間関係を調整

したりする経験がほとんどなかったのである。そのような学習活動をしてきた生徒たちにとって、今回の取組は自ら考えるだけではなく、他との調整も含んでおり、大変な負荷を感じていたのである。この負荷の正体は２月 10 日までに作らなければならないというプレッシャー、協力しない子がいる、グループがまとまらない、頑張ってもおもしろいものができないことが起こり得るのも演劇のプレッシャー等である。

このように考えてみると数値が減少したことは当然であり、単に楽しいだけの取組に終始しなかったといえるのではないだろうか。

③　深まる他者理解

１回目の授業後と最終の舞台発表後のアンケートに増加が見られた項目として、「いつもと　は違うみんなの様子を見つけることができてよかった」25.8%→35.5%が挙げられる。やはり通常の授業とは違った雰囲気が生徒の本音を引き出し、より一層の他者への理解につながった。

④　心と行動に生じた変容

「今までよりも、授業中に質問や意見を言うのが恥ずかしくなくなると思う。」「今までよりも、自分のすることや言うことに自信がもてると思う。」「自分から進んで周りの人に話しかけるようになると思う。」「今までよりも、いろいろなことに興味や関心をもつようになると思う。」といった項目は事前事後で大きな変化は読み取れず、「とてもそう思う」「まあそう思う」を合わせると 60%～70%を維持しており一定以上の成果があったと言える。

★教員編　事後のみ実施

夏に実施した本研修を受けて学校での取組に関わった教員は 5 名だったので、そのアンケート結果に基づいて分析したものをまとめた。

①　将来に向けた職業探し

人将来の職業探しをテーマとしているグループが多かった。答えはまだ出ていないようだが、生徒たちなりに将来のことを考え、模索していると感じた。

②　深まった人間関係と生徒理解

子どもたちの豊かな自己表現が育成され、子どもたちの関係が深まったり、協調性が生まれたりした。普段の授業に比べて、子どもたちが自発的に参加し、とても楽しそうであり、子どもたちがいままで知らなかった友だちの良さや特徴を発見することができた。インフルエンザで休んだ仲間や長欠の仲間にも配役するなど、あちこちのクラスで、仲間に配慮する場面がみられた。従来の教科学習では見られない生徒の成長した姿が見られた。生徒自身が自分を追い込む気分になり取り組んでいた。そのことにより、自分の知らなかった自分に気付くことができたのではないだろうか。また、2 月 12 日の代表グループに選ばれなかったことを、とても悔しがっている生徒が多かったので本番に向けて、グループ内で協力しあっていたことが、改めてわかった。

生徒理解の観点からは、今まで以上に、子どもたち一人一人の個性や能力を発見したり、理解することにつながった。たとえば、とても真面目で学力の高くおとなしい生徒２人がプロット作りの中心となり、活発な生徒にも丁寧にセリフ等を伝え合っている姿があった。欠席した生徒がいても、

グループ内で解決していく力が身に付いたことが何よりも嬉しく、生徒たちが投げ出さず、最後まで話し合い、取り組んでいたのが印象的だった。最後の発表会では普段と全く違う表情や姿勢が見られて驚いた。

③　新しい授業への挑戦

今回の取組は効果的に実施でき、子どもたちの理解を促せたとともに、コミュニケーション・ティーチャー(演劇人)の特性や指導に触れることにより、自分自身も新しい授業内容や教え方に挑戦する気持ちを持つようになった。

（4）まとめ

平田オリザ氏は「演劇入門」（講談社現代新書）の中で、「演劇とはリアルに向っての無限の反復である。その無限の反復の中でゆっくりと世界の形が鮮明になってゆく。この混沌とした世界を、解りやすく省略した形で示すのではなく、混沌を混沌のままで、ただ解像度を上げていく作業が、いま求められている。私たちは、現実生活においてさまざまな言語生活や身体運動によって、外界の事物をリアルに感じ取ろうとしている。それは常に、他者や外界との交点を探る行為である。」と述べている。

コミュニケーション能力の育成に関する実証研修の中で生徒たちは「探究ナビ」の時間に行った学習の活動をリアルに表現することに熱中した。時に喜び、時に怒り、時に哀しみ、時に楽しみながら。他者の意見を聞き取りながらなおかつ自分の意見も主張する、そして、まとめあげていくことの難しさ。まさしく生徒たちは平田オリザ氏が言うところの他者との交点を探って行ったのである。その行為の中でコミュニケーション力が形成されていった。

この取組の成否のカギを握っているのはやはり、指導者である。今回の取組が功を奏したのは夏の研修で演劇に関する知識と技能を深めたセンター附属高等学校の教員とプロの劇団との絶妙のコンビネーションであった。最終発表までのゴールを見据え、その時に付けるべき力をスタート時点で見極めていた。そのゴールに沿った形で、折々に、必要な指導を入れて行く。そして劇団員にポイントのところでアドバイスを生徒に入れてもらう両者のマッチした指導によりこの取組の成果が上がった。

学校には多様な生徒が存在している。多様な生徒にはやはり多様な指導法が必要である。一色の指導では指導に乗りきれない生徒がでてきてしまう。演劇的手法を身に付けた教員が劇団という外部の存在を有効に活用しながら進めた取組は、今後のコミュニケーション能力育成に関する教育に対して無限の可能性を示したものかも知れない。

Ⅲ 連携協力による研修についての考察

１　本研修で開発した関係機関との連携プログラムについて

フリンジシアタープロジェクトのもつ専門性を効率的に的確にコーディネートすることによってはじめて、実際の授業にスムーズに取り入れることができる。授業内容および進め方、そして実施前後の効果測定およびその分析を連携協議会で話し合うことで、よりよいカリキュラムの作成をめざした。楽しい活動を行いながら通常の授業では感じない負荷を克服することで、コミュニケーション能力を、より効果的に獲得することができる。そのようなプログラムをフリンジシアタープロジェクトと連携することによって開発することができた。

演劇ワークショップを効果的に実施し、よりよい成果をあげるためには、[1]演劇ワークショップを年間の教育カリキュラムの中に的確に位置付け、[2]目的・効果・到達点などを講師と綿密に協議・調整して実施する、[3]事前・事後学習を含めた準備、生徒への動機付けに十分配慮する等、受け入れ側の学校の教員の理解と認識が要諦となる。そのためには、教員自身が実際に演劇ワークショップを体験し、その効果を実感できる教員向けワークショップへの参加が非常に有効であった。以上の考えに基づき、フリンジシアタープロジェクトと大阪府教育センターとの情報の共有、および意見・提案の交換など密接な連携体制によって、モデルカリキュラムプログラムを開発した。

２　フリンジシアタープロジェクトの取組について

2003 年より劇団衛星が「体感する算数」と題し、演劇的手法を小学校の主要教科指導に応用する実験的な教科指導を実施した。その後、様々な体験学習に、演劇やダンスなど表現活動の力を用いるプログラムの実施を行っている。フリンジシアタープロジェクトでは、これら「演劇で学ぼう！」シリーズの企画／制作、普及活動を行なっている。

教科指導また総合教育と、表現教育、鑑賞教育の三つの相乗効果を生み出し、高い教育的効果を発揮している。本事業では、プロの俳優が小学校に出向き、あるいは参加を希望する子ども達に集まってもらい、演劇ワークショップを実施する。ワークショップの主なコンテンツは、「コミュニケーションゲーム」「発声練習」「演劇創作」。演劇上演台本を、俳優と児童の共同作業で作成、最終日に観客（一般の観客や全校生徒等）の前で上演する。

「演劇で学ぼう！環境編」

環境学習には「身近な行為が環境問題につながっていることを実感する」、「現在が未来につながっていることを想像する」ことが大切である。「授業」「講演」という形式だけではむずかしい、児童たちが「実感する」というレベルまで、演劇の手法を使って導こう、というのが、本プログラムの取組である。このプログラムでは、児童たちが楽しいキャラクター達の活躍するストーリーを追っているうちに、「現在から連なる未来」を疑似体験し、自然に「自分達のできること」に目を向けてもらう運びになっている。また、観客席でその上演を観る仲間にも、友達が出演しているということで、より能動的に作品を鑑賞することができる。

「演劇で学ぼう！防災編」

お芝居を創りながら、自分たちの暮らしている地域における災害への備えや避難場所、防災器具を知り、学んでいく。次にその学んだことを元にお芝居をつくり、舞台の上で表現し、観客に伝え

る。この活動はこどもから大人までの同様の効果が得られ、上演地域のオリジナル性の高いワークショップが実施できる。また、この事業を行うことで、人々が居住地域について見直し、よりよいまちづくりの始まりになればと考えている。その他、「防犯編」「算数」「食育」など様々なテーマで WS を展開している。

プロの俳優との出会いを通じ、表現する楽しさ、コミュニケーション力の向上、個人の表現力の可能性を引き出すとことができ、生徒たちの自己発見・自己表現、そして友達の新たな一面を発見する視野の広がりをめざしている。

３　連携の実績及び成果

（1）フリンジシアタープロジェクトの人材・手法を研修で活用

学校現場で行う演劇ワークショップに関して実績がある「フリンジシアタープロジェクト」の専門知識を生かし、人材および手法を、研修で活用した。

（2）実証研修における連携

研修で受講した教員を中心として実施した実践検証の中で、シナリオや演技指導及び発表当日の審査などフリンジシアタープロジェクトの専門性を活用した。

（3）効果測定のアンケート項目の開発

演劇、ダンスなど表現活動の力を用いるプログラム「演劇で学ぼう！」事業での実績を元に、本事業の趣旨に合うように効果測定のアンケートを連携して開発し、活用した。

（4）研修の成果物における連携

・報告書作成における連携協力

研修の実施運営を連携して行い、また記録を取って、報告書を連携協力して作成した。

・ホームページ作成における連携協力

学校にて実施可能なカリキュラムの紹介として、ホームページを連携して作成した。

Ⅳ その他

１　キーワード

コミュニケーション能力　演劇　ワークショップ　聞く力　話す力　質問する力
協調する力　劇団　連携　教育センター附属高等学校

２　人数規模および研修日数（回数）

内容	人数規模	回数
研修編	C	4 回(全日 1 日・半日 2 日)
実践編	D	9 回

※人数規模　C（21～50 名）　D(51 名以上)

Ⅴ 参考資料

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム小学校･中学校･高等学校
「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修に係る連携協議会設置要項

１　設置
　本会は、「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム　小学校･中学校･高等学校『コミュニケーション能力育成に関する教育』研修に係る連携協議会」と称する。
２　目的
　本会は、大阪府教育センターの平成 23 年度小学校･中学校･高等学校「コミュニケーション能力育成に関する教育」研修が独立行政法人教員研修センターの平成 23 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラムに採択されたことを受けて、本研修の円滑な実施及び改善に関する指導・助言を行うことを目的として設置するものとする。
３　構成員及び任期
　本会は､大阪府内におけるコミュニケーション能力育成に関する教育の研究に従事するものをもって組織する。
委員は大阪府教育センター所長が委嘱するものとし、その任期は１年とする。
４　運営
　本会の会議は、必要に応じて構成員を招集し、開催する（年間６回程度)。
５　事務局
　本会の事務局は、大阪府教育センター教育課程開発部カリキュラム研究室内におく。
（附則）この要項は、平成 23 年４月１日から施行する。

（構成員）

所　属	職　名	氏　名	備　考
大阪大学コミュニケーションデザインセンター	教授	平田　オリザ	
大阪大学コミュニケーションデザインセンター	特任講師	蓮行	
大阪大学コミュニケーションデザインセンター	特任研究員	紙本　明子	
NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	コーディネーター	門脇　俊輔	
大阪府教育センター附属高等学校	教頭	森　哲仁	
大阪府教育センター附属高等学校	首席	木村　伸司	
大阪府教育センター	教育課程開発部長	清水　隆	
大阪府教育センター	カリキュラム研究室長	蛭田　勲	
大阪府教育センター	主任指導主事	天野　誠	事務局
大阪府教育センター	指導主事	岡本　真澄	事務局

主 催
大阪府教育センター
〒558-0011　大阪市住吉区苅田４-13-23
TEL 06-6692-1882／FAX 06-6692-1898
URL：http://www.osaka-c.ed.jp/

連携協力
NPO 法人　「フリンジシアタープロジェクト」
〒600-8445　京都市下京区岩戸山町 440 江村ビル 2F KAIKA 内
TEL/FAX　075-276-5779
URL：http://www.fringe-tp.net